

栄養改善パートナー通信

第2号の今回から、フルバージョンでのお届けです。

前回ご紹介した紙面企画にあるように、今回から一面記事である「世界で働くパートナー」の掲載を始めます。記念すべき第1回はウガンダの技術協力プロジェクトから、生計向上のための市場志向型農業に栄養の視点を取り入れて、家計管理、作付け計画、収穫物管理の支援をするお話をいただきました。野菜栽培など農業分野で活動する栄養改善パートナーの方、農業と連携した活動をする栄養士など保健分野の方の参考になればと思います。

「栄養」という視点から活動の幅や連携が広がるといいですね。



(上)どの時期にどの食材が利用可能かを可視化するためのカレンダーを作るワークショップの様子

世界で働くパートナー① 収入増加と家族全員の生活向上を目指して

目次:

【シリーズ:日本の栄養改善の経験】	
②質素節約を説いた松平定信	2
【驚き!栄養改善のインパクト】	
母乳育児がもたらす効果	2
【旬の食材・現地の食材】	
スイカ(赤玉種)	2
【マルチセクターって、どんなもの?】	
②問題系図をつくる	3
【私たちもパートナーです!】	
・ 小林恵子さん	3
・ 力丸徹さん	3
・ 竹下晴子さん	3
【IFNAホットニュース】	
課題別研修「農業を通じた栄養改善」	4
【知っておこう】	
栄養不良の概念整理	4

北部ウガンダ生計向上プロジェクト(NUFLIP)は、野菜の栽培・販売を通じた市場志向型農業の推進に関連した活動と、家計管理や栄養・衛生改善といった生活の質の向上に関連した活動を有機的に統合させ、世帯の収入増加と、その増加が家族全員の裨益に繋がることが目指しています。

家族全員が十分食べていくために

内戦の影響もあり、対象地域の農民の大部分は自給自足の農業を営んでいます。多くの世帯では毎年季節的な食料不足に直面し、主食が底を尽き、食事量と回数が減少し、さらには子どもが病気にかかる家庭が増えます。早魃による不作の影響も深刻です。家族全員が十分に食べられる量や不作の場合を考慮した作付けを行わないと、食料不足には対応できません。収穫後の非計画的な食料備蓄の使用や現金化も、自家消費用の食料の減少を起こしてい

ました。こうした状況から、作付け計画や食料備蓄管理、家計管理の研修で「栄養」への配慮を取り入れていきます。

時期による栄養バランスの偏りを配慮

現在の食事を見ると、時期により利用可能な食材が異なり、ある時期にはタンパク質はあるのにビタミンの補給源である野菜類が少ないなど、栄養バランスの偏りが生じています。ワークショップ形式の研修を行い、各月で利用可能な食材のカレンダーを作り、食事バランスへの配慮を促しています。まずは現在の営みの中でできる栄養配慮から始め、そこに野菜栽培からの現金収入が加わり、食卓に上がる食材、食事回数、量への変化を期待しています。

(株式会社JIN 石川渚(栄養改善))

早魃に強い作物を入れて、不作に備えています。

日本とは異なる気候や作物があるなかで、年間を通じて食料調達するための作付け計画のポイントは何か。

石川: 研修では、1年間を通して主食の材料がしっかりと確保され、さらに多様な食材が食卓に並ぶよう作付けから考えることを推奨しています。とはいえ、降雨の変動が大きく思ったような収穫が得られない年が続いているため、雑穀やキャッサバなどの早魃に強い作物を入れて、不作のリスクに備えていくこともお伝えしています。

生計向上を目指し、その前に住民は食料への支出を含め現金収入の管理を学んでいるということでしょうか。

石川: 多くの農民は自給農家で、主な財は家畜や農作物の蓄えです。これらを自家消費や、現金化して学費等の支払いにあてていますが、上手にやりくりできる家庭が少ないのが現状です。研修ではこうした食料や家畜の消費と販売の計画づくりと日頃の管理ツールを紹介しています。将来的には換金作物の販売を通じ、収入の向上が見込めることから、お金の管理についても研修を行っています。